# シンガポールの英語（1）

## —英語重視の二言語政策とシンガポール英語—

小野　礼子

### はじめに

本稿では、Kachru（1992b, 1996）が提唱した英語の三つの圏、すなわちInner Circle、Outer Circle、Expanding Circleのうち、Outer Circleに属するシンガポールの英語について考察する[1)]。まずシンガポールに英語が移植された時期及びシンガポールの言語政策について述べる。次に英語重視の二言語政策がもたらした英語の家庭への浸透と、そこで使われる英語の変種について述べる。最後にシンガポール英語を捉えるための二つの社会言語学的アプローチについて概説する。

### 1. シンガポールへの英語の移植

シンガポールは、中華系76.0%、マレー系13.7%、インド系8.4%、その他1.8%で構成される人口約435万人（うちシンガポール人・永住者は355万人）の多民族・多言語国家である（外務省, 2006）。1867年にイギリスの植民地となったシンガポールは、1959年、イギリスから自治権を獲得し、シンガポール自治州となった。1963年にマレーシア連邦が成立すると、その一州として参加したが、二年後の1965年にマレーシアから分離し、シンガポール共和国として独立した（本名, 2002, 2006）。

英語がシンガポールに移植された（transplanted）（Kachru, 1986, 1992a）のは、1819年にトーマス・スタンフォード・ラッフルズ（Sir Thomas

Stamford Raffles）がシンガポールに上陸し、イギリスの貿易地をこの地にはじめて開設したときとされている。それ以前にも貿易や軍事目的の調査で英語話者がシンガポールを訪れているが、ラッフルズのシンガポール上陸によってイギリスとシンガポールとの正式な関係が始まり、それが今日のシンガポールにおける英語の卓越性を生み出すきっかけになったといってよい（Gupta, 1998）。

シンガポール統治時代のイギリスは英語で教育を受けたシンガポール人エリートの育成を考え、1870年に統治機関や貿易会社などで働いて生計を立てることができる若者を多数世に送り出した。ただ、これらの若者の大多数は英語を使うことができるというレベルには達していなかったといわれている（Bloom, 1986; Wee, 2004a）。しかし、英語は決定的に人々の社会・経済的向上を可能にする言語として確立され、1900年までにはこうしたエリートたちは30年前と比べ格段に高度な英語力を有し、より広範囲にわたる職業領域で活躍するようになっていた（Wee, 2004a）。このシンガポール人エリート層が中心となってその後のシンガポールを英語重視の社会へと導いていったといえる。

## 2. シンガポールの言語政策

### 2.1. シンガポールの公用語

シンガポールでは、標準中国語（マンダリン）、マレー語、タミール語、英語の四言語を公用語として定めている。このうちマレー語は「独立法」で国語にも制定されており、国歌（"Majulah Singapura"）や軍事訓練での号令に使用されているが、一般的な使用率は公用語の中で最も低い（Wee, 2004a; 太田, 1994）。マレー語が国語として定められたのは主に外交上の理由からである。すなわち、シンガポールが1963年から1965年までの短期間ではあるがマレーシア連邦の一員であったためであり、また、マレーシア、

インドネシア、ブルネイといった近隣イスラム諸国に対してシンガポールが中国の一州になる意思がないことを示すためであるといわれている(Wee, 2004a)。

シンガポール政府は住民を中華系、マレー系、インド系、「その他」('others') の四つの民族グループに分類しており、四つの公用語のうち、標準中国語、マレー語、タミール語は、「その他」を除く三つの民族の「民族母語」として定められたものである。標準中国語は中華系、マレー語はマレー系、タミール語はインド系住民の指定民族母語というわけである(Wee, 2004a)。英語は四つの公用語の中で唯一どの民族の母語でもない中立の言語であり、国際共通語として、また、シンガポール人同士の国内共通語として重要な役割を担っている。英語はまた、西欧の科学技術を入手するための言語であり、政治、経済、商業、行政における主要言語である(Wee, 2004a; 本名, 2002；太田, 1994他)。四つの公用語に順位・序列はないが、事実上英語が第一公用語となっており、公文書や政府刊行物には英語が使用され、議会で英語以外の公用語を使う議員はほとんどいない（太田, 1994)。教育においては、1980年、初等教育と中等教育におけるカリキュラムが改訂され、英語が教育媒体の第一言語、民族母語が第二言語として制定された（本名, 2002)。

### 2.2. シンガポールの二言語政策

シンガポールでは、すべてのシンガポール人が英語に習熟していることを前提とした二言語政策がとられており、英語を必ず含めた、英語と母語による二言語教育が行われている[2)]。この政策は"English-knowing bilingualism"として知られている（Kachru, 1992a; Rubdy, 2001; Wee, 2004a; 本名, 2002)。

シンガポールの二言語政策では、英語とほかの三つの公用語についてはっ

きりとした「分業制」が敷かれている。英語は「実用言語」("working language") と呼ばれる一方、ほかの民族言語は「母語」("mother tongues") と呼ばれている。英語は雇用、技術移転、グローバル社会における情報交換といった実用面で重要な役割を果たす、中立的でアジア文化を起源にもたない (cultureless) 言語であり、母語はシンガポール人にとっての文化的「いかり」(cultural anchor) となる言語である。英語は新しい知識を獲得するための言語、国家が経済的発展に向かって進んでいくために必要な言語であり、母語は各民族の祖先について知るための言語、様々な変化の中にあって国民が各々の文化にしっかりと根を下ろすための言語である (Lee Kuan Yew, 1979) (Rubdy, 2001参照)。1986年、当時の文部大臣トニー・タン (Wee, 2004a: 1020より引用) は二言語政策の重要性について次のように述べている。

> Our policy of bilingualism that each child should learn English and his mother tongue, I regard as a fundamental feature of our education system. . . Children must learn English so that they will have a window to the knowledge, technology and expertise of the modern world. They must know their mother tongues to enable them to know what makes us what we are.
> (各々の子どもが英語とその子どもの母語を学ぶこととする私たちの二言語政策は、私たちの教育システムの根本的な特色であると考えます。・・・・子どもたちは現代社会における知識、科学技術、専門的技術を得られるように英語を学ばなければなりません。彼らは [また] 私たちが何者であるかを確認できるように自らの母語を知っていなければならないのです。)

シンガポールは能力主義社会であり、英語の習得が実利に結びつくため、国民の誰もが英語の重要性を認識しており、多くの人々が英語の習得に努めている。しかし、政府は社会の英語化が進むにつれて社会そのものが欧米化し、その結果シンガポールが「根無し草の文化」(太田, 1994: 218) になるこ

とを危惧している。二言語政策はその対策として講じられたもので、これによりシンガポール政府が、国民が経済発展を促進する手段である英語に熟達しながらも、欧米志向ではなく、アジアの文化的価値観を継承していくことを望んでいることがわかる（Wee, 2002a; 大原, 2002; 太田, 1994）。

### 2.3. シンガポールの二言語教育

シンガポールが教育を一括管理し始めたのは、1959年に自治州となってからである。四つの公用語は同等に扱われ、教育媒体の言語は自由に定められていたが、中国語を教育媒体とする中華系の学校と英語を教育媒体とする英語系の学校が多く、マレー語、タミール語を教育媒体とする学校はわずかであった（太田, 1994）。

1960年になると、小学校で英語を含む二言語が必修になり、1966年には、中学校でも英語を含む二言語が必修となった（太田, 1994）。その後、二言語教育にさまざまな試みがなされていったが、政府の英語重視の姿勢は強まる一方であった。しかし、二言語教育の成果がなかなか上がらなかったこともあり、1980年には大幅な教育改革が行われ、小学校から始まる能力別クラス編成が設置された（本名, 2002, 2006; 大原, 2002）。1982年には、中華系の南洋大学が英語系のシンガポール大学に事実上吸収される形で、英語系の国立シンガポール大学が発足された。この時点でシンガポールの大学はすべて英語系になったことになる（太田, 1994）。また、政府は1984年度に中華系の小学校に入学する児童が1%に満たなかったことを理由に挙げ、1987年度からすべての小学校を英語系にすると宣言した（*Far Eastern Economic Review*, 1986）（大原, 2002参照）。そして今日では、教育媒体の第一言語に選択の余地はなく、すべての学校において英語が教育媒体の第一言語であり、ほかの三つの公用語の一つが民族母語として教育媒体の第二言語と位置づけられている（Rubdy, 2001）。

英語が教育媒体の第一言語としての地位を獲得したのは、英語の実用的価値の高さもさることながら、それに加えて、シンガポール政府が英語をシンガポール国民の統合を図る言語（language for national unification）として位置づけたからである（Rubdy, 2001）。英語以外の公用語、すなわち、標準中国語、マレー語、タミール語の中からどれか一つを教育媒体の第一言語にすると、ほかの民族グループから反発が起こるのは必至である（本名, 2002）。また、政府にはこれによって、シンガポールが特定の民族社会と結びつけられるのを避けたいという思いもあった（Wee, 2004a）。しかしながら、三つの公用語をすべて国民に習得させることは困難であり、結局は各々の民族言語に固執してしまうことになる。これでは、いつまでたってもシンガポール人としてのアイデンティティーは確立されない（本名, 2002）。そこで政府は、国民が各民族やその下位グループの民族的アイデンティティーに加えて、より上の、それらを超えた新しいナショナル・アイデンティティーをもつようになることを望んだ。異なる母語を有し、異なる伝統をひいているシンガポール人の超民族的アイデンティティー（supra-ethnic Singaporean identity）の育成が急務であると考えたのである（Kuo and Jernudd, 1994）（Rubdy, 2001参照）。その結果、どの民族にとっても母語ではない、中立的な立場にある英語が国民の統合を図るための国民同士の共通語として採用された。英語は、(1) 民族的背景に関係なく、誰にでも平等の機会を与え、(2) 民族間の調和と国民の統合を促進し、シンガポール人としてのアイデンティティーを養うという二つの大きな役割を果たすために教育媒体の第一言語とされたのである（Lick and Alsagoff, 1998）。

### 3. 英語の家庭への浸透とシングリッシュ

英語重視の二言語政策により、現在のシンガポールでは、学校や職場だけでなく、家庭でも英語を話す人が増えている。表1はシンガポールの2000年

表1. 民族別にみる家庭で最もよく話される言語（単位：%）

| | 中華系 (n=2,236,061) | マレー系 (n=405,602) | インド系 (n=211,015) | その他 (n=34,875) | 全体 (n=2,887,552) |
|---|---|---|---|---|---|
| 英語 | 23.9 | 7.9 | 35.6 | 68.5 | 23.0 |
| 標準中国語 | 45.1 | 0.1 | 0.1 | 4.4 | 35.0 |
| 中国語諸方言 | 30.7 | 0.1 | 0.1 | 3.2 | 23.8 |
| マレー語 | 0.2 | 91.6 | 11.6 | 15.6 | 14.1 |
| タミール語 | — | 0.1 | 42.9 | 0.2 | 3.2 |
| その他のインド諸言語 | — | — | 9.3 | 0.3 | 0.7 |
| その他 | 0.1 | 0.2 | 0.4 | 7.8 | 0.3 |

(Department of Statistics, Ministry of Trade and Industry, Republic of Singapore, 2001に基づく)

国勢調査（Department of Statistics, Singapore, 2001）を基に、家庭で最もよく話される言語の比率を民族別に表したものである。この表が示すように、中華系、マレー系、インド系のどの民族グループにおいても、各々の指定母語（標準中国語、マレー語、タミール語）が家庭で最もよく使われる言語になっているが、母語でないのにもかかわらず、中華系の約4分の1（23.9%）、インド系の3分の1以上（35.6%）が家庭で最もよく使う言語として英語を挙げている。全体をみると、家庭で英語を話す人は人口（5歳以上）の23%で、1980年の11.6%（本名, 2006）と比べると、20年で倍増したことになる。ただ、家庭で話される英語は標準変種ではなく、非標準変種の口語シンガポール英語（Colloquial Singapore English）、いわゆる「シングリッシュ」（Singlish）である場合が多い（本名, 2006）。

シングリッシュは福建語や広東語といった中国語の方言やマレー語の口語変種であるバザール・マレー語（Bazaar Malay：マレー語のピジン化した形で主にマレー系の人々のリングワフランカとして使用されている）やバ

バ・マレー語（Baba Malay：中華系とマレー系の混血であるペラナカンによって主に使用されている）、タミール語の影響を受けていることがわかる変種である（Platt and Weber, 1980）（Wee, 2004a参照）。語彙はマレー語と福建語からのものが圧倒的に多い。シングリッシュは英語系の学校（授業外）で発達し、上述のように家庭にまで浸透していった（Wee, 2004a）。

次の例はシングリッシュによるくだけた状況での親しい友人同士の会話である。（斜体筆者）

Steven：　You *spend* me drink, *can or not?*
Hashim：　*Can.*
S：　Thanks, *man.*
H：　I see you with girl at *hawker centre* last night. Your classmate, *is it?*
S：　Friends only. Friday, she got off-day. Usually we take *makan* and go to disco-*la.*
. . . . . .
H：　She is still *schooling*?
S：　No, working-*la.*
S：　1杯おごってくれる。
H：　いいよ。
S：　ありがとうね。
H：　昨晩、フードセンターで女の子といるのを見たよ。同級生かい。
S：　ただの友達さ。彼女、金曜日がオフ。たいがい、一緒に食事して、ディスコに行くのさ。
. . . . . .
H：　学生かい。
S：　働いてんだよ。

（*Asiaweek*, October 15, 1982）（本名, 2006: 32-33より引用）

上の会話で用いられている You spend me drink, can or not? は Can you buy me a drink? の意味である。このように、Yes/No疑問文に can or not? を用いるのはシングリッシュの特徴であり、答えは Can. や Cannot. になる。

また、Your classmate, is it? や、ほかの例の He watching television, is it? のように、主語と動詞（またはその一方）を省略したり、付加疑問に主語や動詞に関係なく常に is it? を使用したりするのもシングリッシュの特徴である（Wee, 2004b）。そして、シングリッシュの最も顕著な特徴は、Usually we take makan and go to disco-la. や No, working-la. にみられる文末小辞 la や lah といえよう。これらは日本語の終助詞「ね」「よ」「さ」「ぞ」と似ており、la や lah が文末に付くと、非常にうちとけた感じに聞こえる（本名, 2003）。このほか、manは「ね」「よ」「さ」のような意味であり、spend（おごる）、hawker centre（屋内や屋外のフードセンター）、makan（食事）、schooling（学校に行っている）はシンガポールの英語を特徴づける語句である[3)]。もちろん発音も標準英語とはかなり異なる。

このようなシングリッシュに対するシンガポール政府の姿勢はきわめて否定的である。政府は、シンガポールが経済競争力を維持するためには、英語を実用言語として使用し続けるべきであるが、シングリッシュの存在が国民の標準変種の習熟を妨げ、結果として経済競争力を脅かすことになると主張している（Wee, 2004a）。1999年の建国記念集会のスピーチでゴー・チョクトン前首相（*The Straits Times,* August 29, 1999）（Wee, 2004a: 1021より引用）は次のように語っている。

> The fact that we use English gives us a big advantage over our competitors. If we carry on using Singlish, the logical final outcome is that we, too, will develop our own type of pidgin English, spoken only by 3m Singaporeans, which the rest of the world will find quaint but incomprehensible. We are already half way there. Do we want to go all the way? . . . . Singlish is not English. It is English corrupted by Singaporeans and has become a Singapore dialect. . . Let me emphasise that my message that we must speak Standard English is targeted primarily at the younger generation. . . we should ensure that the next generation does not speak Singlish.

(私たちは、英語を使用しているということで、私たちの競争相手よりもかなり有利な立場にいます。もし私たちがシングリッシュを使い続けるならば、必然の結末は、私たちもまた、300万人のシンガポール人にしか話されない独自のピジン英語を発達させてしまうだろうということです。そのようなことばは世界の他の人々には風変わりで面白く感じることはあっても理解することはできないでしょう。私たちはすでにそのようなところに半ばさしかかっているのです。このまま最後まで行きつきたいと思いますか。・・・・シングリッシュは英語でありません。それはシンガポール人が乱した英語でシンガポール方言になったのです。・・・・私たちが標準英語を話さなければならないという私のメッセージは主として若年層の人々に向けられていることを強調させてほしいと思います。・・・・私たちは次世代のシンガポール人がシングリッシュを話さないようにしていかなければなりません。)

このスピーチがきっかけとなり、2000年4月29日に"Speak Good English" 運動 (Speak Good English Movement) が始まった (Wee, 2004a)。この運動については次稿で述べることにする。

## 4. シンガポール英語に対する二つの社会言語学的アプローチ

シンガポール英語を説明する方法として、これまで二つの社会言語学的アプローチが試みられている。一つはシンガポール英語を三つの「下位変種の連続体」(lectal continuum) として捉える方法であり、もう一つはシンガポールの英語使用状況を「ダイグロッシア」(diglossia) として捉える方法である (Alsagoff and Lick, 1998; Wee, 2004a)。

### 4.1. 三つの下位変種の連続体

シンガポール英語を三つの下位変種の連続体として捉えるのは、主としてPlatt and Weber (1980) (Alsagoff and Lick, 1998; Wee, 2004a参照) の考え方である。彼らによると、シンガポール英語には、話者の教育レベルと社

会・経済的背景に関連して、上層語（acrolect）、中層語（mesolect）、基層語（basilect）の三つの下位変種があり、上層語から基層語までが連続して存在しているという。上層語は、三つの中で最も威信が高い変種で、教養のある人々によって話される標準英語に近い、標準英語の地域変種である。下層語は、三つの中で最も威信の低い変種で、教育をほとんど受けていないか、まったく受けていない人々が話す変種である。中層語は、上層語と基層語の中間にある変種で、ある程度の教育を受けた人々や非英語系学校の出身者が話す変種である。ただし、教養のある人々がいつも上層語を話すとは限らない。たとえば、教養のある人でも、上層語を話さないシンガポール人と話す場合に中層語を使用する場合がある。また、かなりくだけた場面や基層語の話者と話すときには、上層語や中層語の話者も基層語を使用する場合もあるといわれている（石黒, 1992）。

この下位変種の連続体は「ポスト・クレオール連続体」（post-creole continuum）（Bickerton, 1975）（Richards, Platt, and Weber, 1985参照）を拡大解釈して考えられたものである。ポスト・クレオール連続体とは、ジャマイカのようなクレオールが話されている社会の人々がクレオールの基盤となっている言語（ジャマイカ・クレオールの場合は英語）の標準変種を教えられるようになると、高等教育を受けた社会的地位の高い人々は標準変種に最も近い地域的標準変種の上層語を話すようになり、教育がなく、社会的地位が低い人々は、標準変種からかけ離れたクレオールやクレオールに近い基層語を話し、残りの人々は両端の変種の中間にあるさまざまな変種、すなわち中層語を話すという状態のことをいう。ただ、シンガポール英語の特徴を三つの下位変種の連続体で捉えるということに関しては、ピジンやクレオールの研究で生まれた概念を現在のシンガポールの英語にそのまま適用していることや連続体が主として英語習熟度の連続体になっていることに無理があるといった意見もある（Alsagoff and Lick, 1998; Wee, 2004a; 大原, 2002）。

### 4.2. ダイグロッシア

シンガポールの英語使用状況はダイグロッシアの概念に当てはめて考えられることもある（Gupta, 1994）（Wee, 2004a参照）。「ダイグロッシア」（diglossia：二言語変種使い分け）はFerguson（1959）（Holmes, 2001参照）が提唱した概念である。ダイグロッシアとは、ある言語社会において、同一言語の二つの変種が併用されているが、それぞれの使用目的が明確に分けられている状態のことをいう。二つのうち一方は威信の高い変種で「H変種」（High variety; H-variety）と呼ばれており、教会での説教、学校（特に大学）の講義、テレビやラジオのニュース、新聞、純文学などで用いられる。もう一方は威信の低い変種で「L変種」（Low variety; L-variety）と呼ばれており、友人や家族との会話や買い物などで用いられる。Fergusonが提唱したダイグロッシアはその後Fishman（1980）（Wardhaugh, 1998参照）により定義が拡大され、ある社会における二つの言語の使い分けも含めて考えられるようになった。L変種に対する人々の態度は一様ではなく、その存在自体を否定する人もいれば、自らの感情を最もうまく表現できる変種として好んで使用する人もいる。ダイグロッシアの例としては、スイスのドイツ語圏における標準ドイツ語（H）とスイス・ドイツ語（L）、ハイチのフランス語（H）とハイチ・クレオール語（L）、パラグアイのスペイン語（H）とガラニ語（L）との使い分けなどが挙げられる（Holmes, 2001）。

Gupta（1994）（Alsagoff and Lick, 1998; Wee, 2004a参照）は、シンガポールの英語の使用状況をダイグロッシアの概念で考えた場合と4.1で述べた下位変種の連続体の概念で考えた場合との違いについて、下位変種の連続体の概念では、シンガポールの英語の連続体が主に英語の習熟度によるものであるのに対して、ダイグロッシアでは、シンガポールの英語をコミュニケーションがなされる場面や状況などに応じて選択される変種の連続体であると指摘している。また、ダイグロッシアの考え方では、シンガポール英語は標

準英語の地域変種としてではなく、アメリカ英語やオーストラリア英語などの母語変種と同じように独立した英語として扱われること、L変種は主に文法面と語彙面でH変種と異なるが、L変種の使用を、言語を用いる際に起こる誤りと捉えるのではなく、状況や話者の情意に基づく選択と捉えることになると述べている（Gupta, 1994）（Wee, 2004a参照）。

ダイグロッシアの本来の定義では、H変種とL変種はそれぞれ異なった目的のために使用されるため、H変種が使用されるところではL変種は使用されず、その逆も起こらないとされているが、シンガポール英語の場合は、そこまで明確な使い分けがなされているわけではない（Wee, 2004a）。とはいえ、標準シンガポール英語は公的な場面や状況で使用され、口語シンガポール英語（シングリッシュ）はくだけた場面や状況で使用されるという使い分けがなされていること、標準シンガポール英語は威信が高いH変種であるのに対し、口語シンガポール英語は威信が低いL変種であること、シンガポール政府と同様に、口語シンガポール英語を否定する人もいれば、口語シンガポール英語こそシンガポール人のアイデンティティーを表す言語であるとして愛着をもっている人もいる（Rubdy, 2001; Wee, 2004a等）というように、L変種に対して相反する態度がみられることなどが、シンガポールの英語使用にダイグロッシアの概念が用いられる理由であろう[4)]。

大原（2002: 183）は、シンガポールの英語使用はダイグロッシアというよりもむしろ「複合ダイグロシア」の概念を用いて説明することができると述べている。大原によると、シンガポールでは社会階層の二分化がみられ、上のほうの階層（大学教員、多国籍企業の会社員、銀行員）では高変種（H変種）と擬似高変種（Forth-High-variety）との使い分けが行われ、下のほうの階層（中華街の店員、建築労働者、ホーカーセンターの店員）では擬似高変種と低変種（L変種）との使い分けが行われているという。そして、英語を重視した二言語教育により、英語はシンガポールのどの分野にも浸透しつ

つあるが、公的な場面や状況で高変種のつもりで実は擬似高変種を使用しているシンガポール人も多く、彼らの擬似高変種がシンガポール英語として外国人に捉えられているのではないかと大原（2002）は推測している。

ここでは、シンガポール英語を理解するためのアプローチとして三つの下位変種の連続体とダイグロッシアの考え方を概説したが、どちらの方法がより優れているかについて決着がついているわけではなく、今なお議論され続けている（Wee, 2004a）。

## おわりに

本稿では、シンガポールの英語について、“English-knowing bilingualism”として知られている英語重視の二言語政策とシンガポール英語を捉えるための二つの社会言語学的アプローチを主にみながら考察した。次稿では、「シングリッシュ」と呼ばれる口語シンガポール英語の文法、語彙、発音の特徴を取り上げるとともに、シンガポール政府が2000年から推進している"Speak Good English" 運動とそれに対する人々の反応について述べる。

### 注

1) Inner Circleとは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなど、英語を第一言語としている国や地域を含む圏のことをいう。Outer Circleは、インド、シンガポール、フィリピン、ナイジェリア、タンザニアなど、英語を第二言語として使用している国や地域を含む圏のことを指す。主としてイギリスやアメリカの植民地であった国々がこの圏に属し、英語は旧宗主国の統治下にあった時代から公用語として使用されている場合が多い。そしてExpanding Circleとは、英語を外国語として使用している国や地域を含む圏のことで、この中に日本、中国、韓国、インドネシアなどの国々が含まれる（Kachru, 1992b, 1996）。

2) ここでいう「母語」とは、政府が指定した民族母語のことである。民族母語は必ずしも個々のシンガポール人の実際の母語と一致するわけではない。たとえば、インド系シンガポール人の場合、指定母語のタミール語を実際の母語としている人もいれば、マラヤリ語、シンハリ語、ヒンディー語、ベンガリ語などの言語を母語としている人もいる（太田, 1994）。また、中華系シンガポール人のうち、中国語の方言である福建語や広東語が母語方言の人にとって、標準中国語は母語（の標準変種）には違いないが、話しことばにおいては外国語のようなものである（大原, 2002）。

3) シングリッシュの特徴の多くはマレーシアの英語にもよくみられる（本名・田嶋・榎木薗・河原, 2002；石黒, 1992等）。

4) 英語以外の言語も含めたシンガポールの言語状況については、ダイグロッシアではなく、「ポリグロッシア」（polyglossia：多言語変種使い分け）という概念が用いられることがある。たとえば、中華系シンガポール人の言語社会では、中国語の二変種、すなわち標準中国語（H）と広東語や福建語などの中国語の方言（L）との使い分けと英語の二変種、すなわち標準シンガポール英語（H）とシングリッシュ（L）との使い分けが行われる。つまり、この社会では二つのH変種と二つのL変種が存在していることになる（Holmes, 2001）。

## 参考文献


Alsagoff, Lubna, and Ho Chee Lick (1998) The grammar of Singapore English. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng (1998) *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 127-151.

Bloom, David (1986) The English language and Singapore: A critical survey. In Basant K. Kapur (ed.) (1986) *Singapore Studies: Critical Surveys of the Humanities and Social Sciences.* Singapore: Singapore University Press. pp. 337-458.

Department of Statistics, Ministry of Trade and Industry, Republic of Singapore (2001) Census of Population 2000. [WWW document]. Retrieved: http://www.singstat.gov.sg/pdtsvc/pubn/cop2000r2.html

Gupta, Anthea F. (1998) The situation of English in Singapore. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng (1998) *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 106-126.

Holmes, Janet (2001) *An Introduction to Sociolinguistics.* 2nd ed. Harlow, England: Pearson Education.

Kachru, Braj B. (1986) *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes.* Oxford: Pergamon Press. Reprinted, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990.

Kachru, Braj B. (1992a) Models for non-native Englishes. In Kachru (ed.) (1992) *The Other Tongue: English across Cultures.* 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 48-74.

Kachru, Braj B. (1992b) Teaching world Englishes. In Kachru (ed.) (1992) *The Other Tongue: English across Cultures.* 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp.355-365.

Kachru, Braj B. (1996) Norms, models, and identities. *The Language Teacher.* [WWW document]. Retrieved: http://www.jalt-publications.org/tlt/files/96/oct/englishes.html

Lick, Ho Chee, and Lubna Alsagoff (1998) English as the common language in multicultural Singapore. In Joseph A. Foley, Thiru Kandiah, Bao Zhiming, Anthea F. Gupta, Lubna Alsagoff, Ho Chee Lick, Lionel Wee, Ismail S. Talib, and Wendy Bokhorst-Heng (1998) *English in New Cultural Contexts: Reflections from Singapore.* Singapore: Oxford University Press. pp. 201-217.

Richards, Jack, John Platt, and Heidi Weber (eds.) (1985) *Longman Dictionary of Applied Linguistics.* London: Longman. [ジャック・リチャーズ, ジョン・プラット, ハイディ・

ウェーバー編.『ロングマン応用言語学用語辞典』山崎真稔, 高橋貞雄, 佐藤久美子, 日野信行訳. 南雲堂. 1988.]

Rubdy, Rani (2001) Creative destruction: Singapore's Speak Good English movement. *World Englishes*, 20: 341-355.

Wardhaugh, Ronald (1998) *An Introduction to Sociolinguistics*. 3rd ed. Malden, MA: Blackwell Publishers.

Wee, Lionel (2004a) Singapore English: phonology. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool*. Vol. 1. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1017-1033.

Wee, Lionel. (2004b) Singapore English: morphology and syntax. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool*. Vol. 2. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1058-1072.

外務省（2006）「各国・地域情勢—シンガポール共和国」〔WWW文書〕 http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html.

本名信行（2002）「シンガポール〔共和国〕—英語は第1公用語」本名信行編著（2002）『事典アジアの最新英語事情』大修館書店. pp. 67-82.

本名信行（2003）『世界の英語を歩く』集英社.

本名信行（2006）『英語はアジアを結ぶ』玉川大学出版部.

本名信行, 田嶋ティナ宏子, 榎木薗鉄也, 河原俊昭（編著）（2002）『アジア英語辞典』三省堂.

石黒昭博(編)（1992）『世界の英語小事典』研究社.

大原始子（2002）『改訂版　シンガポールの言葉と社会—多言語社会における言語政策』三元社.

太田勇（1994）『国語を使わない国—シンガポールの言語環境』古今書院.